The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「１」を含む数量名詞をめぐって
Author(s)	井上, 都
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2002, 36, p. 27-44
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56521
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「1」を含む数量名詞をめぐって

井上　都

1．はじめに

「一つ・一個・一本・一枚…」のような、「1」を含む数量名詞[1]には、「二つ・三個・四本・五枚…」のような2以上を含む数量名詞にはない文法的ふるまいがみられる。この特別なふるまいは、「ひとつ」において典型的にみられる。『学研国語大辞典』（第二版）の「ひとつ」の項では、以下のように記されている。

㊀《名》①数の名。自然数の一番基礎になるもの。いち。ひと。「――しかない」「――年を取る」

②その物だけであること。それだけで他になにもないこと。「伯母さんの手――に育てられて…〈中・銀の匙〉」

③同じであること。同じもの。「虎と蛇とは、――餌食を狙って、〈芥川・杜子春〉」

④一方。一面。「――には将来の計画も必要だ」

⑤｛体言の下につき、あとに打ち消しの語を伴って｝意味を強める。さえ。「何――できない」「人間は薄情なもので昨日までは毎日来た友だちも、今日は門の前を通ってさえ挨拶――して行きません〈芥川・杜子春〉」「自分の病気の話をそんな目の前でされているのに、嫌な顔――しないで、ただ羞しそうな様子をしていた〈堀・菜穂子〉」

三《副》①ちょっと。ためしに。「――やってみるか」

②どうぞ。「――がんばってください」

以上のような記述のうち、「二つ・三つ…」のような2以上の数量名詞と対立しているのは、名詞①の用法のみであり、その他の用法（名詞②③④⑤・副詞①②）には、基本的に、2以上の数量との対立がないと考えられる。このような1と2以上の違いがみられるのは、「ひとつ」の場合のみではなく、次のような場合にも、2以上の数量との対立はない。言い換えれば、「ものやことがらの数量の側面を抽象してさししめす」（鈴木1972）という数量名詞本来の働きを失っている、あるいは背景化させていると考えられる。

(1) 一目で気に入る。

(2) 年賀状一本よこさない。

(3) 「TSUNAMI」一曲で新ミレニアムの年を席巻した。

(1)の場合、2以上の「二目で・三目で」という形式はない。さらに、「一目が・一目を・一目から」というようなデ格以外の他の格関係を表すこともないことから、「一目で」全体で副詞化しているといえる。また、数量名詞が名詞「年賀状」に接続している(2)では、年賀状の数量を一本、二本…と示しているのではなく、人づきあいにおける「電話をする」「時々会う」などとの関係の中で《最低》のことをとりたて、「年賀状さえよこさない」という意味になっていると考えられる。そして、(3)では、「TSUNAMI」という曲自体、もともと1しか存在しないものであるため、2以上の数量との対立はない。この場合は、「TSUNAMI」以外の曲との関係において、《排他的限定性》がしめされ、「TSUNAMIだけで」という〈とりたて〉として機能しているのではないだろうか。

このように、2以上の数量名詞にはない意味・用法が1を含む数量名詞にはある。なお、1と2以上の数の違いについて、宮地（1972）は次のよ

うに指摘している。

一という数と、二以上とは次元的に異なると言ってよいほどに大きな差があり、それは指示語体系「こ」「そ」「あ」における「こ」と「こ」以外とに関連づけて考えられるのではないか。(宮地1972：77)

しかしながら、以上の問題を実証的に詳述した研究は、管見の限りいまだなされていない。[2] そこで、本稿では現代日本語の「1」を含む数量名詞に注目し、どのような条件の場合に、副詞化や、とりたて化がおこるのかについて、実例に則して考察していく。[3]

前掲例(1)「一目で」と、(2)「年賀状一本」(3)「TSUNAMI一曲で」を比較するとわかるように、副詞化がおこるのは＜単独形式＞で、とりたて化がおこるのは＜名詞接続＞の場合である。したがって、＜単独形式＞と＜名詞接続＞の場合をわけて記述していく。以下、**2.** では、数量名詞のタイプに注目し、副詞化・慣用句化をみていく。**3.** では、共起する述語のみとめかた（肯定か否定か）と数量名詞に前接する名詞のタイプに焦点をあてて、とりたて化を記述する。最後に、本稿の要点を**4.** でまとめる。

2. 副詞化・慣用句化

ここでは、＜単独形式＞においてみられる副詞化の場合についてとりあげる。また、さらに慣用句化が進んでいることについてもみていく。

その前提として、次のように数量名詞を分類しておく。

〔A〕一個・一本・一人など…これらは、「二個・三十本・四百人」など、2以上のどのような数量も可能である。典型的な数量名詞である。

〔B〕一目・一口・一息など…これらは、「1」でしか表現できないか、2以上で表現できても「二口、三口」ぐらいまでに限定されている。

2．1．副詞化

すでに指摘されているとおり、数量名詞は、「二人が・二人を・二人に・二人で・二人から」など格関係をあらわしわける点で名詞として位置づけられている。しかし一方で、「ごはんを二杯食べる」「魚を五匹釣る」のように、ゼロ格で数量を表す連用修飾語として機能するような副詞的側面ももちあわせている。

さらに、次にしめすような場合には、数量名詞の本来的意味・用法としての「数量をさししめす」という機能はなくなり、語彙的意味がずれこんでいる。また、格のかたちが「～で」「～に」「～と」のような形式に固定化され、それぞれ、「一目で」「一心に」全体で副詞的に機能している。

「～に」の場合

- 一口に即興といってもじつにさまざまなレヴェルがあり、スタイルがあります。(サウンド：120)　(＝同じようにまとめて)
- (前略) 六週間の休みをいっぺんにまとめて取ってしまう人もいる。(住：188)　(＝同時に)
- 一心にみつめる／よみふける　(＝一筋に、一途に)
- 一手にひきうける／握る　(＝独占して)

「～で」の場合

- 一目でわかる／気にいる　(＝すぐに)

「～と」の場合

- 一段と高まる／悲しい　(＝一層、ひときわ)

このようなかたちでの副詞化は〔A〕(一個タイプ) のような典型的な数量名詞ではおこらず、〔B〕(一目タイプ) でおこる。「一段と」は、〔A〕タイプであるが、2以上になると、「二段に・三段から…」のように、さまざまな格のかたちをとることができ、「～と」で固定されていない。さらに、もとの語彙的意味がずれることなく、基本的な数量名詞として機能

している。[4)]

そして、「ひとつ」の場合は、単独で副詞化している。この場合は、森田（1989）で指摘されているように、他者に対してある事物・事柄を勧めたり、願ったりする場合と、自己の行動に対して試みに行うという場合があり、「ちょっと、ためしに、軽い気持ちで」のような意味で用いられる。

・（前略）君たちがそこまで考えはじめるなら、ひとつ徹底的に考えなさい、先生は傍にいて聞かせてもらう、と言った。（子ども：27）

・「あんたが大人になってもまだこの世にいるなんて、考えるだけでぞっとするよ。だけどまあ、ひとつがんばってみるかね」（ポプラ：170）

以上のように、副詞化は、1を含む数量名詞の中でも、〔B〕（一目タイプ）と「ひとつ」で進んでいる。

2．2．慣用句化

1を含む数量名詞の中には、格のかたちが固定化され、さらにむすびつく述語も限定されて〈慣用句化〉が進んでいるものもある。奥田（1967）によると、慣用句は、大きく二つに分けられる。一つは、「くみあわさっている二単語のうちのひとつが自由な意味を保存し、もうひとつが慣用句にしばられた意味になっている」〈慣用的なくみあわせ〉であり、もう一つは、「形式的には二単語からなりたっていても、意味的には分割できない」〈慣用的ないいまわし〉[5)]である。1を含む数量名詞からなる慣用句は、大半が〈慣用的ないいまわし〉である。

・（前略）禁酒運動が起こり、酔っぱらわないから、しかも、酒より安いから、ということで、紅茶がそれにひと役買った。（紅茶：64）

・(前略) スミソニアンの資料作成にひと肌脱ぐ。(どう：184)

ほかに、「一笑に付する」「一刻を争う」「一芝居うつ」「一息つく／いれる」などがある。これらは、副詞化同様、「数量をさししめす」という機能がなくなっており、〔B〕(一目タイプ) でのみ慣用句化がおこる。6)

以上のように、〈副詞化〉〈慣用句化〉は、＜単独形式＞でおこり、1を含む数量名詞の中でも〔B〕(一目タイプ) に特徴的である。7)

3．とりたて化

副詞化の場合と異なり、〈とりたて化〉は「リンゴ一個」「心がけひとつ」のような、＜名詞接続＞の場合におこる。とりたて化と一口に言っても、述語のみとめかた (肯定か否定か) によって、それぞれの典型として二つのタイプがみられる。述語が否定の場合は、「～さえ」に近づき、述語が肯定の場合には「～だけ」に近づく。また、数量名詞に前接する名詞が〈具体名詞〉か〈抽象名詞〉かという点が〈とりたて化〉に深く関わっている。結論を先取りしていえば、「〈抽象名詞〉ひとつ」において、もっとも典型的に〈とりたて化〉が前景化してくる。以下、否定述語、肯定述語の順にみていく。

3．1．否定述語の場合

次のように、＜名詞接続＞の数量名詞のゼロ格が、否定述語と共起している場合には、最低のことをとりたてる「～さえ」に近づく。

(4) 一人暮らしが長いというのに目玉焼き一つ作れない。

(5) 一人暮らしが長いというのに目玉焼きさえ作れない。

(4)でみられる「一つ」は、「目玉焼き」を一つ、二つ…と数えているのではなく、「肉じゃが」「ハンバーグ」などほかの料理と対比させて、誰にでも作れそうな《最低》の「目玉焼き」をとりたてている。そして、1と

否定述語が共起することにより、「1より小」＝「0」をしめし、「完全否定」の意味になる。[8] すなわち、《最低》の目玉焼きをとりたてることで、料理がいっさいできないことを表している。このような場合の1を含む数量名詞は、(5)と同じように、〈とりたて〉として機能していると考えられる。＜名詞接続＞のゼロ格と否定述語が共起し、完全否定をしめすパターンは、数量名詞に前接する名詞が〈具体名詞〉か〈抽象名詞〉かにかかわらず、〈とりたて化〉がおこっている。

・(前略) ビルはおろか家一軒なく、(中略) この世ならぬ壮大な眺めだ。(癒し：203)

・「泉さんは、わたしの《現物》を見ているのよ。病院で。でもわたしの方は、写真一枚見ていない」(ターン：280)

・たしかにアメリカに旅立つときは、あれほど励まされ、お餞別まで頂戴したにもかかわらず、それっきり手紙一通だしていない。(どう：255)

・いくら歩いても場所の手がかりは一向につかめず――このへんでは、電信柱に番地ひとつかいていないのだ――(後略) (なつ：245)

・(前略) 誕生日を忘れることはない。もっとも、ここ数年はプレゼントなどというのも恥ずかしく、電話一つすることもないのだが。(新聞)

・(前略) いつも泰然としていて子供のために猫撫で声一つ出しもしないおばあさんを驚かすことができた (後略) (ポプラ：44)

以上のように、＜名詞接続＞の数量名詞のゼロ格は、否定述語と共起している場合、《最低》のことをとりたてる「～さえ」に近い意味・用法を表す。

3．2．肯定述語の場合

肯定述語と共起する場合には、あるものごとに《限定》してとりたてる「～だけ」に近づく。ただし、次のように、否定述語の場合と同様、《最低》[9]をとりたてる機能もあわせもつようである。

(6) 点滴一つで大騒ぎして、看護婦さんを困らせる。

(7) 点滴だけで大騒ぎして、看護婦さんを困らせる。

(6)における「一つ」は、「点滴」を一つ、二つ…と数えているのではなく、「手術」「精密検査」などから「点滴」に《限定》してとりたて、さらに「手術や検査に比べれば、点滴くらい大したことではない最低のことなのに大騒ぎする」という意味が伴う。このように、《最低》のものに《限定》するパターンは「〈抽象名詞〉ひとつで」が典型的に表す。[10]

・(前略) 健康で平穏無事、その日が過ごせるささやかな喜びに心から感謝し、平和な家庭生活に幸せを感じると締めくくった。幸せも多彩で、その人その人の感じ方、とらえ方により違ってくる。幸、不幸は心の持ち方一つで変化するものと信じている。(新聞)

・(前略)どんなに状況証拠が真っ黒でも、「宗教弾圧」という言葉を恐れて、世界屈指の優秀さを誇るはずの日本の警察が、しばらくの間まるで金縛り状態であった。(中略)「宗教弾圧」という言葉ひとつで、不思議なことに、まるで魔法のように本質がめくらましにあってしまうのである。(魔女：75)

・市販のバイクと違って、レースに不要と思われるものをそぎ落とした競走車にはブレーキすらついておらず、スピードの加減はスロットルの微妙な動きひとつで決まってくる。(トライ：133)

・84年5月の挑戦状で毒物混入菓子のばらまきを予告。「無差別攻撃」に転じた直後、いとも簡単に流通業界や食品業界のパニックが起きた。(中略) かい人21面相は、情報操作一つで、社会を動

かし、現金を要求することができると大々的に証明してみせた。(新聞)

また、次の例では、「赤紙」「左手」「身」はもともと1しか存在しないものであるのに、「赤紙1枚」「左手一本」「身ひとつ」と表現されている。これは、もともと1しか存在しないものに対して、1という表現を用いることにより、対比性を前面に押し出し、「赤紙」「左手」「身」を強調して《限定》し、とりたてていると考えられる。ただし、この場合、必ずしも《最低》をとりたててはいないようである。

・赤紙1枚で召集され、無理やり家族と引き裂かれ、(後略)(新聞)

・(前略)81歳の今も、重いものなら20キロはある人形を、1時間以上左手1本で支え続けてビクともしない(後略)(新聞)

・(前略)途中までその子を背負って下りた。あの重さと苦しさを思えば、身一つで登り下りするくらいはどうということもない。(カノン:370)

ガ格・ヲ格・ニ格にも同様の機能を果たしているものがある。

・5人の中で橋場ひとりが酔っていなかった。(地下:198)

・(前略)母は私一人を相手にするよりも数倍楽しい一時を満喫しているようだった。(身:133)

・(前略)夫や子どもたちまで同じ不快感と憤怒の渦に巻き込むのは可哀想と、自分の胸一つに納めようとするものだから、息苦しいほどに悔しくなる。(魔女:67)

なお、次のような場合も、《最低》の意味は伴わないが、《排他的限定性》が前面化している。

・「変化球はばらつくので、速球一本に的を絞った」(新聞)

・十年間勤めたハノーバーのコンピューター会社をある日突然辞めて、バックパック一つで世界一周に出かけ、(後略)(ニュー:113)

・「(前略) 飛行機代だけ出せば、あとはぜんぶ面倒見てあげるから。狭いけど、うちのアパートに泊まってよ」かくしてユウコは思いきり良く決心し、ボストンバッグひとつ引っ提げて、遠路はるばるワシントンにやってきた。(どう：214)

ヲ格の場合は、<〈具体名詞〉1を～して>の形式全体で、先の「バックパック一つで」の用例と同様に、文中ではたらいている。

・仕事も家族も捨て、楽器一つを持って旅立っていく。(カノン：401)

・「今朝も携帯電話一つを持って、ゴルフ練習場で汗を流してきた」。(中略) 携帯電話が財布代わりとでもいうように話す。(新聞)

・(前略) 岡さん一人を残して、一家でマレーシアに渡ったんですが。(カノン：252-3)

おもに<名詞接続>のデ格の数量名詞が肯定述語と共起する場合、「〈抽象名詞〉ひとつ」のかたちで典型的に《最低》のものごとを《限定》してとりたてており、ニ格・ヲ格・ガ格においても、《排他的限定性》を表す。

以上、1を含む数量名詞の〈とりたて化〉として、否定述語と共起する場合、肯定述語と共起する場合の典型例をとりあげた。[11] 次節では、このように、〈とりたて化〉が進むことについて、数量名詞に前接する名詞のタイプに焦点をあて、考察する。

3．3．名詞のタイプととりたて化

1を含む数量名詞のとりたて化には、数量名詞に前接する名詞のタイプが深くかかわっている。ここでは、「数量をさししめす」という数量名詞としての本来的意味・用法と〈とりたて化〉の両方がみられ、まとまった用例数が得られるデ格で代表させて、考えていく。

前接する名詞のタイプが〈具体名詞〉か〈抽象名詞〉か、また、数量名詞のタイプが〔A〕(一個タイプ) か「ひとつ」かに注目し、それぞれのく

みあわせをみてみる。まず、前接する名詞が具体名詞の場合についてとりあげる。基本的に、具体名詞と〔A〕タイプの数量名詞がくみあわさると、1を含む数量名詞は2以上との対立において、本来的意味・用法をしめす。

・滑走路1本で国際空港などと呼んでいるのは日本だけだ。(新聞)

ただし、<名詞接続>の1を含む数量名詞が本来的意味・用法をしめすとき、数量名詞のタイプにかかわらず、並列的に提示されるか、対応する他の数量表現と共起してあらわれることが多い。

・関東馬20、関西馬99、地方馬1頭で争い、(後略)(新聞)

・(前略)リンゴ一個で一人前しかつくれないような、派手なむき方だ。(紅茶:97)

一方、次のように、「オーバー」などの防寒着から「セーター」をとりたてている例もみられる。

・最低マイナス五九度を経験した翌日、気温がマイナス五二度になったとき、「ああ、暖かいなあ」と取材人一同異口同音につぶやいたものだ。そして、平均気温マイナス三五度のイルクーツク市に到着したとたんに、暑くて暑くてオーバーなんか着ていられなかった。リポーターの作家など、セーター一枚で街中歩きまわって、(後略)(魔女:132)

具体名詞と「ひとつ」がくみあわさると、とりたての意味をあらわすことが多い。

・学資保険に限ったことではありませんが、貯蓄型保険のおトク度は、電卓ひとつでチェックできます。(新聞)

しかし、次の用例では数量的側面がつきまとうと考えられる。

・ハンバーガーが100円玉一つでいつでも買えるようになり、(後略)(新聞)

次に、〈抽象名詞〉の場合であるが、〔A〕タイプとくみあわさった抽象

名詞のパターンは「電話一本」「ヒット一本」程度に限られ、用例数もわずかである。この場合も以下のように「自分が行くこと」から「電話」をとりたてるなど、〈とりたて化〉しているものが多い。

・何より電話一本で正寛が下りてくるとは限らない。自分が行って、有無を言わさず下ろしてくるのがいちばん確実だ。(カノン：368)

ほとんどの抽象名詞において助数詞の分化は発達しておらず、以下のように、「ひとつ」で表される。このような場合、完全に数量的側面は失われ、とりたて化している。

・「天の時は我々に厳しく、地の利も今はないかもしれないが、人の和はお互いの心がけ一つでつくることができる」(新聞)

ここで数量名詞に前接する名詞のタイプから整理してみると、以下のようになる。

(a) 具体名詞は、＜名詞接続＞の数量名詞が並列的に提示されたり、対応する数量表現と共起した場合、典型的に「数量をさししめす」という本来的意味・用法を表す。特に〔A〕(一個タイプ) の場合には、それが顕著であることが多いようである。

(b) 抽象名詞の場合、大半が〈とりたて化〉している。特に、「ひとつ」の場合は、完全にとりたて化しており、数量的側面は伴わない。

(c) 前接する名詞のタイプにかかわらず、「左手一本で支える」のように、その名詞 (「左手」) 自体が1しか存在しない場合は、〈とりたて〉の機能が前面化する。

1を含む数量名詞が表す意味・用法には二つの方向性がみられる。一つは、2以上の数量名詞と共通した「数量をさししめす」という本来的意味・用法である。もう一つは、1を含む数量名詞特有の意味・用法であり、《最低》・《限定》を表す。これは、自然数の中で「最低・最小」であり、

2以上との対立において、「単数＝唯一」であることから、1を含む数量名詞は、あるものごとが《最低》であることを意味したり、あるものごとに《限定》する。このとき、1がもつ本来的意味・用法が、《最低》・《限定》という意味に抽象化されて、〈とりたて〉の意味・用法が生じると考えられる。このこととかかわって、前接する名詞が〈具体名詞〉の場合は、可算性があるため、1がもつ本来的意味・用法を保持しやすい。しかし、名詞接続の形式で1を明示すると、単なる数量的側面のみでなく、《最低》・《限定》という意味もでてくる。一方、〈抽象名詞〉には基本的に可算性がないため、共起する「ひとつ」は、《最低》・《限定》という意味を表し、〈とりたて化〉しているといえよう。[12] このことが事実であるとすれば、本稿でとりあげた現象はユニバーサルである可能性がある。この点については今後、さらに考察を深めたい。

4．まとめにかえて

以上、「1」を含む数量名詞の特殊性について述べてきたことをまとめると次のようになる。

(a) 「1」を含む数量名詞には2以上の数量名詞とは異なる文法的ふるまいが、大別して二点みられる。

- ＜単独形式＞において、〈副詞化〉〈慣用句化〉がおこる。
- ＜名詞接続＞の場合には、〈とりたて化〉がおこる。中でも、「〈抽象名詞〉ひとつ」の場合が典型的である。

①否定述語と共起した場合は、ゼロ格があらわれ、「～さえ」に近い意味・用法をしめす。

②肯定述語と共起した場合は、デ格が典型的にあらわれ、「～だけ」に近い意味・用法をしめす。

(b) 〈副詞化〉〈とりたて化〉がおこる場合、次の二点において、名

詞性が失われている（あるいは薄れている）と考えられる。

- 「数量をさししめす」という２以上の数量名詞と共通する本来的意味・用法がなくなっている。
- 様々な格関係を表しにくくなり、形式上、特定の格に固定されてきている。

いまだ細部までいきわたらない記述ではあるが、「1」を含む数量名詞の一側面についてとりあげた。今後さらに、数量名詞全体の中で、「1」の特殊性について詳述することを課題とする。

註

1） 本稿で数量名詞と呼ぶ「数量をあらわす語」は、研究史上、「数詞」（池上1940・森重1958など）、「数量詞」（堀川2000など）など名称が一貫していない。本稿では、格の体系が備わっていることに注目し、「数量名詞」として扱う。

2） ただし、沖（1986）では、最小の数「一」を表現することにより強意が成立し、「だけ」「さえ」と同じ意味を表現できると指摘している。

3） 本稿の研究対象は、連用格のかたちをとった数量名詞を中心としており、数量名詞に直接とりたて助詞が接続しているものは扱っていない。

4） このようなかたちでの〈副詞化〉は「1」に特徴的なもので、２以上では、「二度と会えないかもしれない」のように、否定と共起する「二度と」がみられる程度である。

5） 言語学研究会編（1983）も参照。

6） 例外として、〔A〕（一個タイプ）で、次のような例がみられる。

・今度の話、黒川が一枚噛んでいることは明白。（マシアス：51）

7） 慣用句化が進んでいるものは、わずかながら、＜名詞接続＞の場合にもみられる。ただし、**3.2.**でとりあげるような〈とりたて〉の意味・用法もとらえられると考えられる。

・女手ひとつで四人の子供を育て上げた気丈な母である。（天国：32）

・（前略）外に家を構えたければ自分の腕一本で稼いでからにしろ（後略）（トライ：212）

・（前略）皮一枚でつながっているこの関係が、堰を切って崩れ始めよ

うとしている。(墓：83)

8）工藤（2000：118）参照。

9）ここでいう《最低》は、厳密な意味ではなく、一般的なものごとよりも、たやすいものごとであることをしめすのかもしれない。

10）「〈抽象名詞〉ひとつ」ではないが、《最低》に《限定》してとりたてている例として次のようなものもみられた。

・「長銀時代は名刺一枚で取引できた。肩書なしでは事業を起こすことも、商売も難しい」(新聞)

11）このほかに以下にしめすような例もある。ただし、ここでしめすパターンは用例数の上でも、ごくわずかしかあらわれないパターンである。

ニ格・ヲ格に「～さえ」に近い意味・用法をもつととらえられる例がみられた。特に、ニ格においては、他のとりたて助詞（特に「も」）を伴うことが多い。

・大阪のあるネジ屋さんは、自分の作ったネジを見て「美しい」と感動していました。ネジ一本にも心を込める職人の魂は、生き続けているんです。(新聞)

・活気と夜気がどこか甘く、わくわくするような勢いで夜を彩っているのが、風の匂いひとつにもあふれるようだった。(TU：79)

・フィンランド館なんて、苔一つにまで愛情が行き届いている。(新聞)

・ジャクリーン夫人の目が食い入るように夫をみつめ、まばたきひとつを惜しんでいる。アイゼンハワー前大統領は時折深くうなずきながら、演説を聞いていた。(新聞)

3．1． で述べたとおり、ゼロ格は否定と共起し、「～さえ」に近い意味をしめす。しかし、ゼロ格は必ずしも否定と共起するわけではなく、以下のように、肯定と共起する場合もある。ただし、用例もごくわずかであり、「ひとつする（の）にも」の形式が特徴的である。

・(前略）卒業するのは決して楽なことではないようだ。学生の多くは、働きながら学習しているうえ、カリキュラムも通学課程と同じレベルなため、リポート一つ合格するにも、相当の時間がかかる。(新聞)

・唯一自分の意志で、毛皮のコートではなく、お墓を買えたってこと。冷蔵庫一つ買い換えるにも夫の意見に従わなければならなかった。みそ汁の味すら姑に聞かなければならなかった。(墓：39)

また、次のような、「～ひとつにしても」「～ひとつ（を）とっても」

のようなかたちで固定化された場合、後置詞化が進んでいると考えられる。

・麻里子とは、喧嘩一つにしても、俊太郎は麻里子のテンポに合わせなければならないのだ。(鍵：65)

・ハローひとつとってみても、珍しい人に会って、ハロー、(中略) 帰ってきて「ただいま」のかわりにもハローと言う。(身：187-8)

12) 次のような抽象名詞とくみあわさった「1本」の場合、「ひとつ」と同様、「抽象化」を進めていると考えられる。

・こちらはボランティアに運営を任せ、今は携帯電話事業一本に集中している。(新聞)

用例出典

※全調査資料（小説13冊・論述文16冊・エッセイ9冊）のうち、提示用例の出典のみ掲載する。

《小説》 鍵：『鍵』乃南アサ（1992）講談社文庫1996／カノン：『カノン』篠田節子（1996）文春文庫1999／ターン：『ターン』北村薫（1997）新潮文庫2000／地下：『地下街の雨』宮部みゆき（1994）集英社文庫1998／TU：『TUGUMI』吉本ばなな（1989）中公文庫1992／トライ：『トライアル』真保裕一（1997）文春文庫2001／天国：『天国までの百マイル』浅田次郎（1998）朝日文庫2000／なつ：『なつのひかり』江國香織（1999）集英社文庫1999／ポプラ：『ポプラの秋』湯本香樹実（1997）新潮文庫／マシアス：『マシアス・ギリの失脚』池澤夏樹（1993）新潮文庫1996

《論述文》 子ども：『子どもと学校』河合隼雄（1992）岩波新書／サウンド：『サウンド・エシックス』小沼純一（2000）平凡社新書／墓：『墓をめぐる家族論』井上治代（2000）平凡社新書

《エッセイ》 癒し：『癒しの旅　ギリシア・エーゲ海』楠見千鶴子（1999）ちくま新書／紅茶：『紅茶　おいしくなる話』磯淵猛（1993）集英社文庫2000／住：『住まなきゃわからないドイツ』熊谷徹（1997）新潮文庫2001／どう：『どうにかこうにか　ワシントン』阿川佐和子（1994）文春文庫2001／ニュー：『ニューイングランド物語』中井貴恵（1990）角川文庫1997／魔女：『魔女の1ダース』米原万里（1996）新潮文庫2000／身：『身がわり』有吉玉青（1989）新潮文庫1992

《新聞》 新聞：CD－毎日新聞2000版

引用文献

池上禎造（1940）「助数詞攷」『国語国文』10-3
沖久雄（1986）「数詞・助数詞の文法」『日本語学』5-8
奥田靖雄（1967）「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8（奥田1996『ことばの研究序説』むぎ書房　所収）
金田一春彦・池田弥三郎編（1978）『学研国語大辞典』（第二版1989）学習研究社
工藤真由美（2000）「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『〈日本語の文法2〉時・否定と取り立て』岩波書店
言語学研究会編（1983）『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房
鈴木重幸（1972）『日本語文法・形態論』むぎ書房
堀川智也（2000）「数量詞連結構文の本質」『国語と国文学』77-2
宮地敦子（1972）「数詞の諸問題」『〈品詞別日本文法講座2〉名詞・代名詞』明治書院
森重敏（1958）「数詞とその語尾としての助数詞」『国語国文』27-12
森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

（大学院後期課程学生）

On Numeral Nouns Containing "1"

Miyako INOUE

It has been pointed out that there is a great difference between "one" and "two or more." However, no study has treated the phenomena in detail. This paper, based on a large number of examples, observes the unique grammatical behavior of numeral nouns containing one which is different from that of numeral nouns containing two or more.

Numeral nouns containing one have two distinct grammatical patterns of behavior. The first is adverbialization in the single form. The second is function change to *toritate* when a numeral noun containing one follows a noun, which is typical in the case of "abstract noun + *hitotsu*." This functional change to *toritate* is classified into two types, according to the type of predicate (affirmative or negative). When a numeral noun containing one co-occurs with a negative predicate, it appears with the case particle zero, and shows the meaning and usage close to that of "*-sae*." With an affirmative predicate, it typically appears with the instrumental case particle "*-de*" and shows the meaning and usage like that of "*-dake*." Numeral nouns containing one generate abstraction and express the meaning of "the minimum" and "limited" on this condition.

As above, in the case of adverbialization and functional change to *toritate*, numeral nouns containing one lose and weaken their function as nouns in two aspects; (a) They lose the original meaning and usage, that is, "to indicate number and quantity." (b) They are used in a less variety of cases and fixed in a specific case form.

キーワード：数量名詞　ひとつ　抽象名詞　とりたて化　副詞化
Keywords：numeral noun, *hitotsu*, abstract noun, functional change to *toritate*, adverbialization